

# 病理学第一

## 1 構成員

	平成19年3月31日現在
教授	1人
助教授	0人
講師（うち病院籍）	0人（0人）
助手（うち病院籍）	3人（0人）
医員	0人
研修医	0人
特別研究員	0人
大学院学生（うち他講座から）	6人（2人）
研究生	2人
外国人客員研究員	0人
技術職員（教務職員を含む）	2人
その他（技術補佐員等）	2人
合 計	16人

## 2 教員の異動状況

- 梶村 春彦（教授）（H7. 11. 1～現職）  
 奥寺 康司（助手）（H17. 5. 1～H18. 8. 31）  
 新村 和也（助手）（H17. 4. 1～現職）  
 森 弘樹（助手）（H18. 4. 1～現職）

## 3 研究業績

数字は小数2位まで。

	平成18年度
(1) 原著論文数（うち邦文のもの）	12編（0編）
そのインパクトファクターの合計	36.47
(2) 論文形式のプロシーディングズ数	0編
(3) 総説数（うち邦文のもの）	0編（0編）
そのインパクトファクターの合計	0
(4) 著書数（うち邦文のもの）	0編（0編）
(5) 症例報告数（うち邦文のもの）	0編（0編）
そのインパクトファクターの合計	0

### (1) 原著論文（当該教室所属の者に下線）

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. Sano T, Kitayama Y, Igarashi H, Suzuki M, Tanioka F, Chiba K, Okudera K, Sugimura H :

Chromosomal numerical abnormalities in early stage lung adenocarcinoma. Pathology International 56: 117-125, 2006

2. Yamashita K, Igarashi H, Kitayama Y, Ozawa T, Kiyose S, Konno H, Kazui T, Ishikawa S, Aburatani H, Tanioka F, Masaya S, Sugimura H : Chromosomal numerical abnormalities profiles of gastrointestinal stromal tumors. Jpn J Clin Oncol: 36: 2: 85-92, 2006

インパクトファクターの小計 [2.48]

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

1. Suzuki H, Sugimura H, Hashimoto K: P16 in oral squamous cell carcinomas-A with biological behaviors: immunohistochemical and fish analysis. Journal of oral and maxillofacial surgery: 64: 1617-1623, 2006
2. Suzuki H, Sugimura H, Hashimoto K: Overexpress of heat shock protein 27 is associated with good prognosis in the patient with oral squamous cell carcinoma. British journal of oral and maxillofacial surgery: 45: 123-129, 2006
3. Kikuchi H, Yamashita K, Kawabata T, Yamamoto M, Hiramatsu Y, Kondo K, Baba M, Ohta M, Tanaka T, Suzuki S, Kitagawa K, Kitagawa M, Sugimura H, Konno H: Immunohistochemical and genetic and metastatic liver gastrointestinal stromal tumors: sequential analyses. Cancer Science: 97: 2: 127-132, 2006
4. Miwa S, Uchida C, Kitagawa K, Hattori T, Oda T, Sugimura H, Yasuda H, Nakamura H, Chiba K, Kitagawa M : MSM2-mediated pPB downregulation is carcinogenesis in a p53-independent manner. Biochemical and Biophysical Research Communications : 340: 54-61, 2006
5. Sugimoto M, Furuta T, Shirai N, Ikuma M, Sugimura H, Hishida A Influence of chymase and Angiotensin I- converting enzyme gene polymorphisms on gastric cancer risks in Japan. Cancer Epidemiol Biomarkers Prev 15:1929-34, 2006

インパクトファクターの小計 [13.09]

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. Kanaly R A, Hanaoka T, Sugimura H, Toda H, Matsui S, Matsuda T : Development of the adductome to detect DNA damage in humans. Antioxidants & Redox: 5:6: 993-1001,2006
2. Midorikawa M, Yamamoto A, Ishikawa S, Kamimura N, Igarashi H, Sugimura H, Makuuchi M, Aburatani H : Molecular karyotyping of human hepatocellular carcinoma using single-nucleotide polymorphism arrays. Oncogene: 25: 5581-5591, 2006
3. Kitayama Y, Igarashi H, Kozu T, Nagura K, Ohashi Y, Sugimura H: Repeated fluorescence in situ hybridization by a microwave-enhanced protocol. Pathology International: 56: 490-493, 2006
4. Raimondi S, Paracchini V, Autrup H, Barros-Dios JM, Benhamou S, Boffetta P, Cote ML,

Dialyna IA, Dolzan V, Filiberti R, Garte S, Hirvonen A, Husgafvel-Pursiainen K, Imyanitov EN, Kalina I, Kang D, Kiyohara C, Kohno T, Kremers P, Lan Q, London S, Povey AC, Rannug A, Reszka E, Risch A, Romkes M, Schneider J, Seow A, Shields PG, Sobti RC, Sorensen M, Spinola M, Spitz MR, Strange RC, Stucker I, Sugimura H, To-Figueras J, Tokudome S, Yang P, Yuan JM, Warholm M, Taioli E. Meta- and Pooled Analysis of GSTT1 and Lung Cancer: A Huge-GSEC Review. Am J Epidemiol 164: 1027-42, 2006

5. Tarapore P, Shinmura K, Suzuki H, Tokuyama Y, Kim S-H, Mayeda A, and Fukasawa, K : Thr199 phosphorylation targets nucleophosmin to nuclear speckles and represses pre-mRNA processing. FEBS Lett, 580: 399-409, 2006.

インパクトファクターの小計 [20.90]

#### 4 特許等の出願状況

	平成18年度
特許取得数（出願中含む）	0件

#### 5 医学研究費取得状況

	平成18年度
(1) 文部科学省科学研究費	3件 (790万円)
(2) 厚生科学研究費	3件 (758.2万円)
(3) 他政府機関による研究助成	0件 (0万円)
(4) 財団助成金	2件 (225万円)
(5) 受託研究または共同研究	2件 (1,376万円)
(6) 奨学寄附金その他（民間より）	0件 (0万円)

##### (1) 文部科学省科学研究費

梶村春彦（代表者）特定領域研究 修復遺伝子多型の喫煙関連がんおよび多発がんリスクへの影響 560万円（新規）

陶 弘（代表者）若手研究B 酸化的損傷修復遺伝子MYHの消化管癌への関与についての研究100万円（継続）

森 弘樹（代表者）若手研究B ヒト腫瘍におけるEph/Ephrinファミリーおよびその周辺蛋白の発現機能解析 130万円（継続）

##### (2) 厚生科学研究費

梶村春彦（代表者）環境化学発がん物質の曝露評価法の開発及び疫学研究への応用による発がんリスク評価にかんする研究「DNA付加体に関する検討および環境要因への遺伝的感受性に関する検討」 538.2万円

梶村春彦（分担研究者）環境中の発がん及び発がん抑制要因の検索とその作用機構の解明に関する研究 120万円

新村和也（分担研究者）発がん機序に基づいた胃がんの予防に関する研究「遺伝子多型と胃発

がんリスクに関する研究」 100万円

(4) 財団助成金

梶村春彦（代表者）財団法人 喫煙科学財団 喫煙行動と遺伝子多型 200万円  
 森 弘樹 財団法人 愛知県がん研究振興会 25万円

(5) 受託研究または共同研究

梶村春彦（株）常光 tissue microarrayとbac clone を用いた腫瘍マーカー探索と自動染色装置の  
 基礎研究

梶村春彦 浜松労災病院 病理診断およびテレパソロジー

7 学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	1件	1件
(2) シンポジウム発表数	1件	0件
(3) 学会座長回数	1件	1件
(4) 学会開催回数	1件	0件
(5) 学会役員等回数	1件	0件
(6) 一般演題発表数	1件	

(1) 国際学会等開催・参加

3) 国際学会・会議等のシンポジウム

1. Sugimura H : MYH polymorphism in Japanese cancer subjects. 2<sup>nd</sup> International Conference on Toxicogenomics. Korea. Nov.2006
2. Sugimura H : The 11<sup>th</sup> Japan-Korea Research Workshop Cancer Research in Post-Genomic Era. Korea. Dec. 2006

4) 国際学会・会議等での座長

OE symposium Global Networking of Pathological Diagnosis, Hamamatsu Jan 30, 2007（主催および座長，[総合司会]）

5) 一般発表

ポスター発表

AACR, Washington DC

8 学術雑誌の編集への貢献

	国内	外国
学術雑誌編集数（レフリー数は除く）	0件	0件

(2) 外国の学術雑誌の編集

Carcinogenesis (Oxford) editorial board (1F=5)  
 Pathology International editorial board (1F=1) くらい

- (3) 国内外の英文雑誌のレフリー  
 Clinical Cancer Research, Cancer Letters, など10数回

## 9 共同研究の実施状況

	平成18年度
(1) 国際共同研究	1件
(2) 国内共同研究	6件
(3) 学内共同研究	3件

- (1) 国際共同研究  
 南京大学 ヒト癌の分子疫学 科研費など

- (2) 国内共同研究  
 国立がんセンター  
 東京大学先端研  
 京都大学  
 九州大学  
 聖隷三方原病院  
 磐田市立総合病院  
 県西部医療センター

いずれも癌の遺伝，環境，表現型相関に関する研究科研費など

- (3) 学内共同研究  
 消化器内科，消化器外科，呼吸器外科，呼吸器内科，臨床検査部，臨床看護学科

## 10 産学共同研究

	平成18年度
産学共同研究	1件

1. 株式会社 常光 (継続)

## 12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

1. 助手の定着率が悪く，プロジェクトが途中で中断してしまったりして，論文にあらわれる成果としては満足のいくものではないが，これは，現在のとくに基礎医学などの分野の若者の根拠のない都市集中施行や，都市の中間管理職のわがまま，あるいは都市部の施設の，実績やニーズではなく潤沢な税収に基づいた過剰なポストの割り振りによることがあり，当教室の魅力があまり

に低いからではない。と思う。つまりgeopoliticalな問題が大きい。いっぽう、国内外の留学からもどった助手（助教）が教室に参加し、今後は期待の大きいところである。また、在英の卒業者の参加も近々期待される。

今年度は、厚労省の癌助成金の梶村班として、adductomeという概念を提出した。ヒト発癌、とくに突然変異のもとになる、DNA 付加体を網羅的に検出しようという試みである。

また、SNP arrayとわれわれの長年つちかってきたFISH技術の組み合わせが効を呈しはじめ、cancer genome atlas の完成にも貢献できそうである。

### 13 この期間中の特筆すべき業績、新技術の開発

Microarray解析をほぼそと始めている状況である。Softwareの導入や、試用をすすめている。Virtual slide, telepathologyについてはいち早く導入がはじまり、website上で、学生用の実習標本などが閲覧可能になった。

### 14 研究の独創性、国際性、継続性、応用性

1. EphA7, Neil1, Tiam 1といったわれわれの数年前からあつかっている分子について、websiteの1項目を書けという依頼がよくまいこんでおり、できるだけ対応するようにしている。いわば、百科事典の項目の分担執筆のようなものであるが、国際的に発信するという意義があるとおもわれる。国際誌からのreviewの依頼は多いが、なかなか対応できていない（筆無精も外国語になるとひどくなる）
2. 継続して行っているFISHの技術を基礎にした、商品開発が進んでいて、癌の治療法を示唆するような分子病理診断が本邦津々浦々までひろまれば本望である。